熊日1961.07.09

母親から胎児に移る

熊本医学会で発表 水俣病患者の毒物

熊大水俣病特別研究班が水俣病の症状と原因について中間報告する熊本医学会第二百十五回例会は、八日午後一時半から熊大医学部第二講義室で関係者約五十人が集まって開かれた。本田熊大学長も聴講にきたが、この学会では前回にひきつづき同研究班の臨床、病理各部門担当の八人の教授陣から水俣病と水俣地方に集団発生した脳性小児マヒ患者の関係についての調査報告が行なわれた。

発表の中心となったのは、水俣病の原因物質と考えられる有機水銀によって起こる中枢神経系の中毒と、脳性小児マヒ患者にみられる水俣病によく似た症状との対比。

同医学部第一内科徳臣晴比古助教授、耳鼻咽喉科野坂保次教授、小児科原田義孝助教授らが、臨床的考察や嗅覚、味覚運動に起こる障害、脳性小児マヒ患者の発生分布状況と、有機水銀が母親の体内で乳汁、毛髪などを通じて生まれてくる赤ん坊に悪い影響を与えている胎生期の遺伝的因子などについて、それぞれ発表した。また第二病理学の松本英也助手は「同地方における脳性小児マヒの剖検所見」と題して、さる三月末に脳性小児マヒで死んだ水俣市内の二歳六カ月の女の子の解剖結果を報告、水俣病の特徴とみられる小脳部分の力（顆）粒型の委縮や脱落がこの患者にもみられ、また水俣病と同じように大脳半球の神経細胞がすくなくなっているなどから水俣病患者の母親の胎盤や乳汁を通じて毒物が胎児に移ることが考えられると発表して注目された。

水俣病はさる二十八年ごろから水俣市一帯で発生し、これまで八十七人の患者のうち三十四人が死亡している。原因は水俣湾でとれる魚貝類をたべるために起きる中枢神経系の中毒と考えられ、またさる三十年から三十五年まで同市湯堂、月ノ浦、茂道などで十七人の脳性小児マヒ患者が集団発生、手足や口がしびれるところなど水俣病に症状がよく似ているため、原因については有機水銀の移行がもっとも有力とされていた。